

佳作

ぼくは一人じゃない

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校四年 長江 圭大

「いたいような気がする…」。そうじのさい中、足をひねったらしい。いたみが続いたので、お母さんに整形外科に連れて行ってもらった。すると、はくり骨折であることがはん明。「外で遊べないな。体育のクラスマツチ楽しみにしていたんだけどな」。ぼくはうなだれるしかなかった。

次の日から、松葉づえについて学校に行った。ぼくのクラスは二階だ。「あつ、手すりが無い！どうやって上がるう…」。ぼくの心は不安でいっぱいだった。その時、

「じゃあおんぶしよう。」

と先生がやさしく言ってくれた。まるでちやうのう力者のようにぼくの気持ちがかかるみたいだった。不安だった気持ちはすくになくなった。友達も心配して、

「大丈夫？手伝おうか？」

と声をかけてくれた。それから、夏休みに入るまでの二週間、毎朝お母さんが車で送ってくれたり、学校に着いたら、友達がむかえに来てくれたり、先生は、ぼくが転ばないよう後ろから見守ってくれた。

このケガを通して、さい初は、楽しみにしていたことができずともショックを受けたし、松葉づえの生活にもなれずに、心によゆうがなかった。だけど先生や友達がぼくのことを一生けん命考えて支えてくれたことによって、ぼくの気持ちは変わっていった。思い通りに動けず、じれったいような気持ちから、こんなに心やさしい友達がいて、ぼくはなんてめぐまれているのだろうと。そして気づいたことが二つある。

一つは自分が元気に生まれて、毎日学校に行けることは当たり前ではないということだ。だからいつもの生活を大切にしたい。二つ目は、ぼくは一人ではないということだ。ケガの前はぼく一人で何でもできると思っていたが、実はいつも支えてくれる先生や友達・家族がいるからこそ、ぼくという人間が作られていたのだった。それが分かったから、ぼくは周りの人が「幸せだな」と思える空間を作れる人

になりたいと思う。そのためにみんなの気持ちによりそって、一しよによるこんだり悲しんだりしたい。